動物たちの恩返し　　カビール

昔むかし、あるところに悪さばかりして手のつけようのない若者がいました。父親は困りはてて、物知りのばあさんのところへ行って相談しました。ばあさんは、
「いちどその子をよその国へ旅に出して、とことん修行させたらいい。わたしにまかせておおき。うまくやってあげよう」といいました。
ある日、若者が、いばりくさって通りを歩いていると、むこうから、物知りのばあさんがやって来ました。ばあさんは、
「おまえ、いったい何をいばって歩いてるんだい。おまえなんか、美しいシャルツと結婚もできないくせに」といって、にやにや笑いました。
これを聞くと、若者は家に走って帰って、父親に、
「ぼくはこれから旅に出て、美しいシャルツと結婚するんだ。お弁当を用意してよ」といいました。父親は、喜んで旅の仕度をしてやって、いいました。
「出かける前に大事なことをいっておくから、よく覚えておくんだぞ。だれにでも親切にすること。小さいものをそまつにしないこと。わかったか」
若者は、
「ああ、覚えとくよ」と約束して出かけました。
しばらく行くと、若者のまわりにありが群がって来ました。ありたちは、食べる物がなくてお腹をすかせていました。
「どうか、食べ物をいただけませんか」
若者は、すぐに近くの村に行って、大麦をひとふくろ買って来てやりました。ありたちは、大麦を食べてしまうと、何度もお礼をいって、若者に、手を一本ちぎって渡しました。
「もしいつか私たちの助けが必要になったら、この手を火に投げ入れてください。すぐにあなたのところにまいります」
若者は笑って、
「おまえたちに助けてもらうことなんかないさ」といいました。それでも、ありの手はふところにしまって、旅を続けました。
しばらく行くと、いのししに会いました。いのししは泣きながら、

「どうか、食べ物をいただけませんか。子どもたちが飢え死にしそうです」といいました。若者は、豆をひとふくろ買ってやりました。いのししは喜んで、からだの毛を一本抜いて若者に渡しました。

「もしいつか私たちの助けが必要になったら、この毛を火に投げ入れてください。すぐにあなたのところにまいります」

若者は笑いとばしましたが、いのししの毛をありの手といっしょにふところにしまって、また旅を続けました。

しばらくすると、はちがたくさん群がって飛んでいました。はちたちは泣きながら、

「どうか、食べ物をいただけませんか。食べるものが何もないのです」といいました。

若者は、蜜のいっぱい入ったつぼを買って食べさせてやりました。はちたちは、喜んでお礼をいって、はりを一本くれていいました。

「もしいつか私たちの助けが必要になったら、このはりを火に投げ入れてください。すぐにあなたのところにまいります」

若者は笑いましたが、はりもふところに入れてまた歩きだしました。

しばらくすると、こんどは、わしに会いました。わしは泣きながら、

「どうか、食べ物をいただけませんか。食べるものが何もなくて、子どもたちが飢え死にしそうです」といいました。若者は近くの村に行って肉を買い、わしにやりました。わしは、肉を子どもたちにやってから、羽を一本体から抜いていいました。

「もしいつか私たちの助けが必要になったら、この羽を火に投げ入れてください。すぐにあなたのところにまいります」

若者はわしの羽もふところに入れて旅を続けました。

しばらくすると、あしの茂みにやってきました。あしのくきの中に、悪魔のイブリスがとじこめられていました。若者が茂みのそばを通りすぎようとすると、悪魔のイブリスが泣きわめいていいました。

「ああ、このあしのくきから出しておくれよ」

若者は、

「もちろん助けてやるよ。おまえはぼくに何も悪いことをしていないからね」といって、すぐにイブリスをあしのくきから出してやりました。イブリスは喜んで、自分のつめを切りとって若者に渡していいました。

「もしいつかおれの助けが必要になったら、このつめを火に投げ入れてくれ。すぐにかけつけるよ」
若者は、お礼をいってつめを受けとると、ふところにしまいました。それから、シャルツのいる村をめざして旅を続けました。
　ようやく村に着くと、若者はシャルツの家に行って、父親にいいました。
「あなたの娘さんと結婚させてください」
父親は、
「では、これからいう仕事をやってごらん。うまくやれたらシャルツと結婚してもいいが、失敗したらおまえの頭をちょん切るぞ」といいました。若者は、
「わかりました。早く仕事をいいつけてください」といいました。
「そんならいうが、あそこの倉に、小麦と大麦がごちゃごちゃにつめこんである。あしたの朝までに、小麦と大麦をきちんと選り分けるんだ」
　若者は倉に行きましたが、こんなにたくさんの麦を分けることなんかできそうにありません。若者は泣きだしてしまいました。けれども、夜になると、助けたありを思いだして、ありの手を火の中に投げ入れました。すぐにありが現れました。若者は、
「あしたの朝までにこの小麦と大麦を選り分けないと、頭をちょん切られてしまうんだ」といいました。ありは、
「そんなこと、わけありませんよ」といいました。たくさんのありが四方八方から集まってきて、麦を引きずって運びはじめました。夜が明けないうちに、小麦の山と大麦の山ができました。若者がお礼をいうと、ありたちは走りさっていきました。
　つぎの朝、シャルツの父親が倉にやって来ました。若者は、
「仕事はうまく片づけましたよ。さあ、シャルツさんと結婚させてください」といいました。シャルツの父親は、
「おまえは確かにひとつめの仕事は片づけたな。だが、そう簡単に許してはやれない」といいました。そして、若者を森に連れていって、
「あしたの朝までに、この森の、木の周りの土をぜんぶほりかえすんだ」といいおいて、行ってしまいました。若者は、しばらく考えてから、火を起こし、いのししの毛を投げ入れました。すぐに、いのししが現れました。若者が、
「あしたの朝までに、この森の、木の周りの土をぜんぶほりかえさないとだめなんだ」

というと、いのししはブウブウ鳴いて仲間を呼びました。たちまち、四方八方からいのししが集まって来て、土を掘りかえしはじめ、夜が明けないうちに仕事を片づけてしまいました。

つぎの朝、シャルツの父親がやって来ていいました。

「三つ目の仕事をいいつけるからよく聞くんだぞ。あしたの朝までに、この村の半分だけを雪でまっ白にするんだ」

シャルツの父親が行ってしまうと、若者はすぐにわしの羽を取り出して火に投げ入れました。たちまちわしが現れました。若者が、

「あしたの朝までに、この村の半分だけを雪でまっ白にしないとだめなんだ」というと、わしは飛びさって、たくさんの鳥を連れて戻ってきました。鳥たちが村の半分に羽を落とすと、まるで雪でおおわれたようにまっ白になりました。

つぎの朝、シャルツの父親は、満足していいました。

「さあ、娘と結婚させてやろう。だが、あしたの朝までに自分でシャルツを見つけるんだ。この屋敷のどこかに隠れているからな」

若者は、自分の部屋に戻り、イブリスのつめを取りだして火に投げ入れました。すぐにイブリスが現れました。若者が、

「おまえはシャルツがどこにいるかわかるかい」ときくと、イブリスは、

「もちろん。シャルツの父親は、中庭に穴を掘ったんだ。穴は上にむしろをかけてふさいであって、大きな石がひとつがぶせてある。その穴の中にシャルツは隠れてるのさ」

と答えました。

若者は、シャルツの父親のところに行って、

「くわをかしてください」といいました。それから、中庭に行って、くわで石を取りのぞき、むしろをはいでいいました。

「シャルツはここにいます」

シャルツの父親はいいました。

「よくも娘をみつけたもんだ。では、あしたの朝、おまえの部屋に、屋敷のほかの娘たちといっしょにシャルツを連れて行こう。みな同じ服を着ていて同じベールをかぶっている。どれがシャルツかいい当てるんだ。うまくいい当てられたら、結婚させてやろう。失敗したら、おまえの頭をちょん切るぞ」

若者は、部屋に戻ると、はちのはりを取りだして火に投げ入れました。すぐにはちがやって来ました。若者がわけを話すと、はちは、

「お茶の子さいさい。あしたの朝、娘たちがやって来たら、はちのお供（とも）を連れた娘に気をつけるんです。それがシャルツですよ」といいました。

つぎの朝、シャルツの父親は、屋敷じゅうの娘たちを連れて若者の部屋にやって来ました。娘たちはみな同じ服を着て同じベールをかぶっていました。若者ははちのお供を連れた娘を探しました。すると、まん中の娘の頭のまわりに、はちが何千匹も群がって、ブンブンいっていました。はちの羽がお日さまに照らされて輝き、娘の頭に後光（ごこう）がさしているかのようでした。若者は、その娘に近づいていいました。

「やあ、シャルツ」

父親は、手を打って、

「そのとおりだ」といいました。

こうして、若者は美しいシャルツと結婚しました。そして、シャルツを連れて自分の村に帰りました。それからは、若者はもう悪いことなんかしないで、とってもいい人になりましたとさ。

村上郁再話

資料『世界の民話17カビール』竹原威滋訳／ぎょうせい